

「この人 05」

小杉隆 76 歳 神奈川県

八 木 俳句歴は七年とお聞きしましたが・・・

小 杉 私は文芸とは無縁の建築屋でしたが、何にでもめり込むタイプでして 20 年ばかりシルクロードの研究に没頭しました。日本の古代建築の胴張柱に魅せられましてね。この様式がシルクロードをどのように伝えられたのか知りたくて・・・西は、ギリシア、ローマ、トルコ、シリア・・・東は韓国から中国、インドと歩きまわりました。ところが研究半ばにして、脳梗塞になり中断せざるを得ないことになりました。そんなときに知人から 俳句を勧められました。ほどなく、本阿弥書店発行の月刊誌「俳壇」で八木健選の微苦笑俳壇を見て、これだと思ったのです。

八 木 うれしいですね。作品を二三ご披露ください。

小 杉 「三越の買物袋に春大根」
「受験子に馬鹿貝食はせてはならぬ」
「葬儀屋に招き猫みる臃かな」
「水色のとんぼと遊ぶアルテミス」

八 木 三越の買物袋の句はプライドの高さと大根という下世話なものの取り合わせに滑稽がありますね。ご子息のお嫁さんが尾崎紅葉の曾孫と聞きましたが・・・

小 杉 それなんですよ。息子の嫁の父親が尾崎伊策という人で、日本テレビのディレクターだったんですが、「実は私は尾崎紅葉の孫なんです」というんです。それだけなら驚きませんが、祖父も滑稽俳句をやっていました。というんです。私の俳句をなにかで見て伊策さんも驚いたようですよ。

八 木 不勉強でした。紅葉が滑稽句をやっていたとは

小 杉 紅葉は正岡子規と同じ年に生まれ同じ年になくなっているんですが、ふたりは、ライバルだったようです。

子規が「写生」という技で俳句の大衆化を実現したのに対して紅葉は狂句でしたから難しい。だから大衆化はできなかった。「我楽多文庫」という日本初の総合文芸誌は紅葉が中心になってはじめてもので、その中で紅葉は狂句の選者を務めていたのです。

八 木 どんな句をつくっていたのですか

小 杉 これが難しいのですが・・・
井戸替のつる瓶に塩谷二三匹・・・これは「判官といはれ井の鮒小おどりし」という狂句の選評がわりに紅葉が書いたもので、月刊誌川柳マガジンに出ていた橋口武士さんの解説によれば、「仮名手本忠臣蔵で幕府の執権・高師直が塩谷判官の妻に横恋慕してかなわず塩谷判官をいびる。高師直から「鮒侍」とからかわれた塩谷判官は堪忍袋の緒が切れて刃傷に及ぶという筋書き。句では「井戸替をしていたら鮒が二三匹いました」という内容を「塩谷・・・がいたとしたもの」なんです。

八 木 なるほど・・・これは歌舞伎の知識がないと理解できません。

小 杉 難しいけれども可笑しい。
紅葉は滑稽句の前衛でしたね。
私はこの最近、紅葉と八木健が結びついて仕方ないのです。平成の世にこれだけ滑稽で暴れる奴がいると知ったら紅葉も大喜びするんじゃないかと。実は私は熱海のお宮の松で八木健と尾崎伊策の対談を密かに画策しているんですよ。

八 木 いいねいいね。ぜひ実現しましょう。
きょうは貴重なお話をありがとうございました。
紅葉も曾孫が小杉さんのご子息と結婚なさったことで、滑稽句のあとつぎができるとお喜びでしょうね。